

Aggressive!

思い出せー！

「つメギどかめ」のお話を！

― 百里を行く者は九十九里を半ばとする ―

1月も今日で終わり、全体授業も終わり、受験もいよいよ最終段階、あつという間やったねえ、つてまだ終わってないか。しかし、69期は、よく伸びたねえ、伸び方はほんまに史上最高や。これから、私学の2月入試まで、あとわずか、国公立2次まで25日、まだまだ伸びる！最後の一瞬まで伸びるでえー！（こ）まで伸びるとい

うことは、やり方が正しかったということやし、心の持ち方も間違っていなかったということや。だから、上り調子の人は、しょうもない心配なんかせず、同じように同じペースで残りの日々を過ごさんやで。変なやつものいらん言葉に惑わされたらあかん。特別なことは何もいらん。自分を信じて、泉陽を信じて、淡々とがんばっていこうぜ。僕はもう心配はしてない。

うさぎは序盤のリードを過信し、最後の最後で詰めを誤り、敗者となった。かめは自分のできることを「サボらず」「焦らず」「あきらめず」しつかりやつて、勝利を手にした。物事は、99%まで勝つていても、最後の1%の詰めを失敗すれば、99%までの努力が水の泡になるんや。100までやりきつて初めて、その目標は完成となる。こまでがんばってきた君たちだからこそ、その努力を絶対に無駄にしたらあかん。センターがあかんかった人、私学の志望校が厳しいと感じている人、あきらめるのはまだ早い！伸びる時期がちょっとずれていただけ、ということもある。残りの1ヶ月弱で飛躍的に追い込み、一気に逆転、なんてことも過去にたくさん見てきた。いつブレイクするかはGod only knows。いや。

「成功は努力をやめた瞬間消えてなくなる。あきらめず努力を続け



大阪府立
泉陽高等学校
69期担任団
2017年
平成29年
1月31日
(火曜日)
第19号



た者のみに成功はやってへる。」

(亀の甲より年の冕)

進路指導部より

「関学の教養はどれぐらい出来たら合格しますか？」
「数日、何人かの人から聞かれた質問です。」

「ネットにはこう書いてあるのですが……」と細かく調べている人もいますが、そのネタ元はよく聞くと知東袋だったりGoogleだったりするのです。

私が皆さんから進路の質問されたときは、絶対ネットは見ません。その大学の募集要項を読みます。そこに書いてあることは間違いなく「本当のこと」です。しかし、ネットに書いてあることは不確かなことが多い。例えば、最初に書いた関学の合格点をもっともらしく書いてあるサイトもありますが、それは過去に受けた人が「これぐらいかな」という感覚を書いているだけです。そんなことに一喜一憂する暇があれば……続きは言わなくてもわかるはずですよ。

さて、センター試験も終わりました。

まず、**今予定通り(もしくはそれ以上)取れた人へ**

確かに、数字上はセンターで合否は半分決まります。が、合否を「本当に」決めるのは、間違いなく2次試験です。同じ大学を目指す人のセンターの点数はそんなに幅はありません。でも、2次力は個人差が大きい。センターA判定で不合格になった人を、私は、これまで何人も見てきました。泉陽マラソン10キロでいえば、センターが良かった人は、距離を9.5キロにおまけしてもらったぐらいのものです。A判定のAは危ないのAです。

次に、**思うほどとれなかった人へ**

キツイことを言うようですが、あなただけ条件が悪かったり、意地悪されたわけではありません。必ず何か足りなかったことや、甘かったことがあるから失敗したのです。そこから目をそらしたまま、志望を下げて受験しても、結果は同じ。逆に自分と向き合って、気持ち

を立て直した人には、大逆転があるはず。D判定のDは「大丈夫のD」です。(Yabo dachikano)

教務部より

2・3月の登校について

1月31日(火)で全ての授業は終了です。次の全員の登校は、2月27日(月)卒業式予行28日(火)卒業式のみとなりました。受験結果報告や各種講習、個別指導、自習などをしに登校する際、左記の日程とそれぞれの注意事項に十分留意して、行動して下さい。

日程	登校に関する注意	自習のできる教室
2月1日(水)～21日(火)	1・2年生の授業と、考査の実施に支障のないように	1・2年生の授業中は、学習室Cも可能。HR教室も可能。
2月22日(水)～24日(金) 2月考査期間	マナーを守りましょう。	考査中は 視聴覚教室のみ
2月27日(月)卒業式予行	11時～登校可能 集合は13時、HR教室	
3月1日(火)～7日(火) 高校入試準備		学習室のみ
3月8日(水)～15日(水) 高校入試	登校禁止	



特別授業の変更や、自習の様子などを見ながら、手前味噌かもしれませんが、例年になくルールを守ることができると学年だったと思います。「きちんと」できること、それは自分のためだけでなく、他者への想像力が働いて

いたからでしょう。実際に私自身も随分と助けられました。(浅井)

卒業式予行日についての連絡

- ・13時各HR教室に集合です。
- ・卒業アルバム等、配布物が結構たくさんあるので、大きめの鞆や袋を持参するように。
- ・受験した学校、学部、学科・コース、この時点までの合否、進先(この時点で決まっていたら)等を聞き、各自すぐに答えられるよう、自分の情報を整理しておいて下さい。

『インゲが4人?』リトキヤ

もうすぐ69期生のみなさんも卒業を迎えるわけだが、今日は過去18年の泉陽での教員生活の中でも貴重な体験(?)をした61期生のことについて話そうと思う。

時は2006年の1月、それまで3年間近く生徒会部長という役職(今ならば石橋先生にあたる)にあつてクラス担任を持ってなかった私は、そろそろまた担任を持ちたいという気持ちでいた。そこで3月いっぱい、生徒会部長が終れば4月より新入生の担任を持ちたいと希望していたところが一旦そこへ、邪魔が入った。

当時中3の私の次女が「泉陽を受ける」と言い出したのである。過去に何度か泉陽の文化祭を見に来て、すっかり気に入っていたらしい。親父のいる学校へわざわざ来るなんて普通は嫌がるものと思うのだが、本人にそこを聞いただと「そんなの関係ない。行きたいところへ行く。」と言う。ちなみに親子で同じ学校というのはそれほど珍しいわけではなく、過去には本校にもいくつか例があるのは知っていた。しかし、これもあるうに、このままでは同じ学年になつてしまう。これは前例も無いだろうし、世間的にもタブーであろう。

当時の教頭先生に相談した。これは私、担任をやめておくべきですよね……

答えは意外だった。「別にいいんちゃう。」ただしあくまでこれはその当時ならでのことである。現在ならば絶対にダメであろう。

こうして私の61期生の担任と次女の泉陽受験は、同時進行で準備が進められていった。しかしそこにはもう一発、



衝撃が待っていた。入試の出願受付が始まった初日、担当していた先生から「今日、イシダという子が3人も出願に来た。私には双子の甥がいる。兄らなみに当時、某私立高校の教員の長男次男である。しかしその年の正月に会った時には、自転車通えるの高校か、場合によっては思い切ったM高校を受けるの聞いていて、S高校の話は全く無かったのである。」

かくして2006年4月から3年間、本校には4人の「イシダ」が存在することになった。3人(特に次女にはこれから3年間、くれぐれも公私混同しないように訓示した。これはわが親族のことながら本当によさ守ったと思う。家で学校の内部事情などを聞くことなど、全く無かった(もちろん聞いてきても口が裂けても言えないが。ただし私は担任できるクラスに限られることになったのである)が、尚、芸術は次女は美術を、甥2人は書道を選択し、こどもも自然に親父に気を遣うてくれた。あと5月の終わりになって、甥2人は最初に入っていた囲碁将棋部を辞め、何と吹奏楽部に入っていたのである。しかしこども彼らはあくまで自然にふるまってくれた。

今回、全く私的な話にここまでお付き合い下さってありがとうございました。ちなみにこの3人が卒業した2009年の3月、私は泉陽での在職ちょうど10年目を終えた。その時には真剣に、もう転勤だと思っていた。しかし今なお、こんな貴重な体験をさせたもらった母校にこうしてとどまり、69期生のみなさんを担任として送り出せることを本当に幸せに思う。



「ハイマツ」にならえ

「松に聞け 現代文明へのレクイエム」という文章がある。皆が持つている筑摩の評論入門 第七章所収の評論である。

一九六三年 高度経済成長の真つ只中、乗鞍岳という我が国有数の聖なる修行の山に、無残にも自動車一台あれば簡単に山頂近くまで行けるドライブウェイを一本通した。乗鞍エコーラインである。人を容易には寄せ付けなかった「山」に行業と称して人々は簡便に入り、誰も車にさえ乗れば、山の頂近くまで難なくたどり着けるようになったのである。人々は「山」を行楽の対象とのみ考え、天然の恵みを無畏蔵に

与え、しかし生命をも奪いかねない「山」という存在に、畏れや敬いの念、そして宗教の香りを感じしることを、すっかり忘れてしまった。

この道はまた、自然に甚大な被害をもたらした。動物を追いやい払い、植物を枯らした。その象徴がハイマツである。高山に植生する松だが、筆者は、この自然の崩壊は心の崩壊と深く関わる。即ち、ハイマツの枯死は、心の破壊と言っているのである。ハイマツの死が、日本人の心の変容、崩壊と如何にリンクしているかを、検証し、論評する。

著者は藤田三、没年を見るとき度今から十四年前である。教科書のコラムで切れ味鋭い文に出逢って以来、ずっと気になっていたが、本格的な氏の文章をじっくり読んだのは今回が初めてだった。亡くなられたことも知らず、文章は何度も繰り返し読み、味わい深く噛みしめた後、改めて、生前に、講演なりテレビのインタビューなり何なりで、直接に話を聞いておきたかったものだ、つくづく思った。

この「松に聞け」は、文系の現代文の授業で取り上げたが、生徒諸君には藤田氏の卓抜な文章構成と、些か今の時代には余り語られなくなつた論点の設定に、——だからこそ貴重であり、生徒諸君には読んでほしいのだが、——彼らは面喰らい、また読解と解答に手こつたようだ。それくらい、噛み込めのある硬質の文章である。では「松に聞け」から「ハイマツにならえ」とはどういうことか。それを次に触れよう。



ハイマツは、高山にのみ自生し、寒い気候と強い風に耐えるべく、地を這うように生え広がる(右の写真の如く、斜面に添うように生育する)ことから「這い松」と称された。

さて「ハイマツ、枯死体の解剖結果より、平均寿命百年余、幹直径8cm弱、されば、年に1cmの1.3強ずつ成長した、というより、年にたったの0.3mm強しか成長しなかつた」と言う方が相応しい。それは、積雪の加重、高山の強い風圧をうまう、たわめる「知恵」である。即ち、まともに受けるのではなく、吸収

し飲み込みながら生きるマツの知恵である。こうして彼らは、太古の昔より今日まであるのだ。これを氏は「従いつつ逆らう」生き方と呼んでいる。何と羨望な呼び名であろうか。逆境の中でめげず、堪えて、しかし己の志は決して曲げない。生きられるだけ、細いながらも、僅かなながらも生きていく。順調な環境で我が儘一杯に育つた者——筆者はこう呼ぶ——彼らとは対照的に、肥え太らず、高くも聳えない、幹すらも細く、しかし、しっかりとしている。大学など行って当たり前、親にもその周りにも感謝せず、進字する意味も働かず、意味も探らうとせず、親の脛齧りて平然としている輩とは違つ、ということである。

藤田氏は、このマツの生き方を「柔軟な我慢強さ」とも呼ぶ。近頃の若者は、職場で上司に叱責されたり、取引先とトラブルしたりと、さささと動機先を辞めてしまつたらしい。「ハイマツにならえ」。

また氏は次のようにも言う。「高く聳え立つものでないだけに一層……『気高い品位』をもって私たちの前に立ち現れる。私は高山帯でハイマツをこの目で何度も見ているが、こんな風に見たことはなかつた。名人の手に掛ければ、世界は一変する。隠された次女での品位とも、氏は言っている。つまり、一見気が付かぬが、その生き方の奥をつくづく眺めれば、自ずと悟られる「気高さ」である。

泉陽に来て、このように我慢強く、隠された気品ある生徒、高く聳えぬが、しかし地道に努力し、少しずつだが枝葉を伸ばしていき、そんな自立たぬが、キラリと光る若者に何人にも出逢つた。いや、もつと多く何十人にも逢えた。逢えたことを感謝する。教員生活の晩年に、こんな幸せを味わえることは、自分を省み給え。ハイマツのようか? それとも、我が儘でガマンのできぬ〇〇のようか? もう一月だ。私立本番、国立の二次も近づく。でも成績は思つたよう……。しかし、そんなことでめげようとする! 強風の圧に耐えかねた時、這つのだ。そして、風が止むのを待ち、いい状態になるまで我慢するのだ。しかしその時マツは休んでいるか?

否、根からは僅かな水と栄養を吸い上げ、陽が当たれば光合成をしている。成長に備え、養分を貯えているはずだ。「ハイマツにならえ」! 勉強を怠るな、地味に日々努めよ。人生いつてもい、時季はかりではない。逆境の時「柔軟な我慢強さ」で「従いつつ逆らう」生き方を知ろう。そして、実践しよう。易しい所に変えてたら受かつてたかも。悪魔が囁いたら、聞いた振りして、逆らえ! 己を貫け、自信を持つ

つて出願した所に向かって全力を尽くせ。大阪を離れる者、地方はいいよ。私は旅が好きだから分かる。大阪にない味がある。先輩は誰も悪口を言わぬ。辞めて帰って来る者もない。静かに、自分が選んだ道、最善を尽くせ。これ受験のみならず人生の鉄則だ。皆、それを貫いて、辛い時はお互い声を掛け合つて、辛抱すれば、やがては必ず春がやってくる。受験は団体競技でもあるよ。孤独になつてはいかん! その時まで、静かに力を蓄えよ。しんどくなつたら思い出せ、そして実践。たわむのだ、やがての実力の爆発に備えて。

折々の花、折々のうた

この時期は花がなくて困窮する。しかしそろそろ寒牡丹の季節、長谷寺や麻生寺が賑わう。梅は年が少し遅いながら、京の北野天満宮や道明寺さんや道真公ゆかりの杜若が賑やかだ。

牡丹散りて打重りぬ二三片
一昨年の市大の入試で採られた加藤 樹郎の文中にあった互詠無村の句、樹郎は、流動する自然を巧みにとらえ、絵画的に評していたが、牡丹の花びらがひらひらと、一片、一汗舞い落ちて、地面で重なり合つた一連の動きを、映像のようにとらえた句。地面落ちた瞬間を詠じたものではない。無村には「園王の口や杜若を吐かんとす」の名句、第4巻も、園王は地獄の閻魔大王、真つ赤牡丹の花を巧みに、愉えたもの。



ひら〜と風は空ゆく冬ぼたん
貴貴も好き俳人の一人である。「風は空ゆくが羨逸、東の芭蕉西の貴貴」と並び称された。誠のほかに狂歌など、の名言を遺す。伊丹の人

侘び助の垣もゆかしき 鴻池
鴻池の益所新田の管理運営跡が東大阪にあるが、何と高い高い生垣が佐助、佐助の改良種、一重で半開の花を付けた。豪商の趣味に刮目させられる。



ひとこともはかたききやふく寿草 召波
黒柳狂歌は京の女子無村の弟子。福寿草は正月の飾りにするが、新暦の正月には自然では間に合わぬ。促成で正月に咲かせようとする。自然では旧暦の正月、二度空頃に咲く、咲いているものもあれば、まだ蕾の堅いものもあるとの風情を詠んだものか。君たちの春にこの花が咲くことを願う。



二ものむめに遅速を愛すかな 師匠の無村にこんな句があるのを見付けた。「むめは梅のこと。たとえ遅速はあっても、道真公由来の智慧ある梅の、めでたき知らせの到来を待っている。(小休止) 編集後記」出願完了、愈々入試も、紙面でも時季を反映、折々の歌にまで入試の話題、受験終わるも、講習、予備校入試、諦めず可能性信し粘り強く、試験定の勉強も本番でも、どれ位入りたいか、念ずれば通す、やってくる事、自信を糧に会場では落ち着いて、無心で臨めれば合格だ、彼国の頭領の不可解で、世界は更に混沌と、難しい時代になった意志力